

浦和大学短期大学部経営情報科における 情報科目カリキュラムに関する研究

米岡 学

キーワード：経営情報科、資格・検定試験、情報科目カリキュラム

- 1 はじめに
- 2 経営情報科の取り組み
- 3 取得可能な資格試験
- 4 資格取得という観点から見た各情報科目のあり方についての私見
- 5 まとめ

1 はじめに

2003年4月浦和大学開学と共に浦和短期大学経営科が浦和大学短期大学部経営情報科として生まれ変わった。今回の改組は、社会情勢や学生の動向などを鑑み「経営科」を「経営情報科」に変更して、以前より増して「情報教育」が充実することになった。具体的には、新たに情報科目が6科目（「情報倫理」、「コンピュータプレゼンテーション」、「Eービジネス論」、「経営情報論」、「基礎プログラミング」、「応用プログラミング」）が追加され、その内2科目（「情報倫理」、「コンピュータプレゼンテーション」）が、学科の必修科目である。情報学が専門の私は、情報教育が充実して大変嬉しく思ったが、その一方でいくつかの問題点も出てきた。人事面では改組により、経営情報科の情報系の専任教員は私1人になった。従って、私が経営情報科の情報科目全体（19科目）のまとめ役を勤めることになった。最初の仕事として、情報科目カリキュラムを作成することになった。実は、この仕事は私を十分に悩ませた。その中で一番悩んだのは、「自分が担当しない科目のシラバスの作

成」であった。本来「シラバス」というものは、その科目を担当する教員が作成するものである。しかし今回は諸事情により、自分が担当しない科目のシラバスも作成しなければならない状況になった。その理由としては、

- (1) 「上級情報処理士」などの資格を授与する「全国大学・短期大学実務教育協会」に提出する書類の期限が学内の教務事務日程より早期だったこと。
- (2) 改組に伴い科目によっては、非常勤講師だけで担当する科目が現れ、このような科目については専任教員がシラバスを作成する必要があったこと。
- (3) 新設科目の中には、学問的に新しくまだ確立していないものがあり、ある程度研究しなければシラバスが作成できなかったこと。

などが挙げられる。

(1) については、経営科の時代に取得できる資格に「情報処理士」・「ビジネス実務士」があった。今回、経営情報科に改組することでさらに「上級情報処理士」の資格も取得できるようになった。本学科で上級情報処理士を取得するためには、「全国大学・短期大学実務教育協会」に申請書類を提出する必要があった。提出書類の中に各科目のシラバスがあり、その提出期限が学内のシラバス作成期限より早期であったため、提出用のシラバスを作成しなければならない事情があった。

(2) については、「ソフトウェアデザインⅠ・Ⅱ」などがそれに当たる。

この科目は経営科の時代からある科目であり、当時は専任教員も担当していた。経営情報科になり専任教員がはずれてしまい、新設科目である「基礎プログラミング」と「ソフトウェアデザインⅡ」の内容が重複することもあり、専任教員が新しくシラバスを作成しなければならなくなった。

(3) については、「情報倫理」や「E-ビジネス論」などがそれに当たる。これらの科目は、学問的に新しくまだ体系づけられていない分野である。まず、この科目にふさわしい教科書になる書籍を探すことから始まる。どのような内容を、どのように教育するかを研究し把握しなければ、シラバスは作

成できない。したがって、相当の時間を掛けてシラバスを作成した。

このような作業を続けて調査・研究していく中で、どのように教育すれば学生が理解しやすいか、また、資格取得ができるかということを常に問い続けた。そのときに私が得た知識や考えなどを、まとめてみることにする。

2 経営情報科の取り組み

2-1 経営情報科

ここでは、2002年に2003年経営情報科開講に向けて、準備したことをまとめる。2002年度の前期には、経営情報科としてのカリキュラムの全体が発表された。経営情報科のカリキュラムは、旧経営科のカリキュラムに新たに情報科目6科目が追加されたものだった。新設科目の一覧表を、表2-1に示す。

表2-1 新設科目一覧表

	科目名		年次	単位数	形式
1	「情報倫理」	必修	1年	2単位	講義
2	「コンピュータプレゼンテーション」	必修	1年	1単位	実習
3	「経営情報論」	選択	2年	2単位	講義
4	「E-ビジネス論」	選択	2年	2単位	講義
5	「基礎プログラミング」	選択	2年	2単位	実習
6	「応用プログラミング」	選択	2年	2単位	実習

これを見た私の第一印象は、「情報倫理」と「E-ビジネス論」は、半期科目として成立するものだろうかというものだった。これから、浅学非才な私の悩みが始まった。この時点では、どの科目をだれが担当するかは決まっていなかった。しかし、「経営情報科で情報学を専門とする専任教員は私1人である」ということより、全く係わり合いを持たないで済むということは有り得ないと考えた。加えて、これらの科目を担当する、しないに関わらず研究しておく必要性があると考えた。夏休み前に、吉澤学科長より、「新科目について担当することがあるかも知れないので、準備をしておくように」と言われ、2002年の夏休みは、新科目の研究を始めた。2002年度の後期は、各科目と担当教員が、未確定のまま大学・短期大学実務教育協会に提出する「シラバス」を作成することになり、不安と焦りの中で地味な作業が続けられた。

2-2 上級情報処理士

情報処理士は、浦和短期大学経営科の1998年度入学生より取得できるようになった資格である。この資格は、本学科において全国大学・短期大学実務教育協会（2003年より全国大学実務教育協会に名称変更、以下、実務協会と表記）が指定した必修科目及び選択科目を合わせて履修し、所定の単位数を取得することで、実務教育協会から情報処理士などの称号が付与されるものである。1998年度から2002年度入学生までの情報処理士の資格を取得するための科目表を表2-2に表す。この当時は、上級情報処理士の資格は4年制大学用になっており、短期大学では取得しにくいものであった。しかし、この規定が平成14年4月1日に改定にされ、短期大学でも上級情報処理士の資格が取得できるようになった。表2-3に改定された情報処理士の資格取得の科目表、表2-4に上級情報処理士の資格取得の科目表を示す。表2-2と表2-3、2-4を比較検討すると、今回の改訂では情報処理士の資格取得に際し情報科目以外の科目も多く認定科目になっていることに気づく。このことにより、短期大学でも容易に上級情報処理士の資格を取れるようになった。現在、全国で上級情報処理士の資格が取得できる大学が39校、短期大学が66校あり、改定前に比べ急増した。

本学科が上級情報処理士の資格取得を導入した経緯は、次の通りであった。当時の入試企画室長（白戸教授）より「経営科から経営情報科に改組するに際し、情報分野で何かセールスポイントになるものはないか」と聞かれ、私は今回の改組により、上級情報処理士の資格取得ができることを提案した。つまり、「本学科は短大でも4大と同じ資格（上級情報処理士）が取れる」ということをセールスポイントにした。しかし平成14年の改定により、このように言えない状況になった。事実上の規制緩和により、多くの短大で上級情報処理士の取得ができるようになり、その価値が薄まったのである。誠に残念なことであるが、これはどの短大も生き残りをかけた勝負に出てきたのが、このような形になって表れたのだと思う。他の短大と差別化を図る魅力的な何か新しいものを、早急に探さなければならないと実感した。

表 2-2 情報処理士の資格を取得するための科目表 (2002年度まで)

分類	科目名	所定単位数
選択 1	情報処理概論(2)・情報基礎論(2) 情報システム論(2)・情報管理論(2)	4 単位以上
選択 2	<u>コンピュータリテラシー I (1)・同 II (1)</u> 文書処理演習 I (1)・同 II (1) ソフトウェアデザイン I (2)・同 II (2)	6 単位以上
選択 3	経営科学(2)・情報社会論(2)・情報ネットワーク論(2) <u>簿記原理 I (2)・同 II (2)</u> ・会計学原理(2)	10 単位以上

注 1) () 内は単位数。 注 2) 下線が引いてある科目は学科必修科目。

表 2-3 情報処理士の資格を取得するための科目表 (2003年度より)

	科目名	単位数
必修	情報処理概論(2)・ <u>コンピュータリテラシー I (1)・同 II (1)</u>	4 単位
I 群	情報基礎論(2)・情報システム論(2)・ <u>情報倫理(2)</u> コンピュータプレゼンテーション(1) 経営情報論(2)・E ビジネス論(2) 情報管理論(2)・ソフトウェアデザイン I (2)・同 II (2) 文書処理演習 I (1)・同 II (1)・情報ネットワーク論(2) 基礎プログラミング(2)・応用プログラミング(2)	各群より 2 単位以上 計 16 単位以上
II 群	経営科学(2)・ <u>経営学総論 I (2)・経営学総論 II (2)</u> <u>経営管理総論 I (2)・経営管理総論 II (2)</u> 会計学原理(2)・マーケティング論(2)	
III 群	情報社会論(2)・流通概論(2)・経済学(2)・経済原論(2)	
IV 群	哲学(2)・倫理学(2)・心理学(2)・国語表現法(2)	

注 1) () 内は単位数。

注 2) 下線が引いてある科目は学科の必修科目または選択必修科目。

表 2-4 上級情報処理士の資格を取得するための科目表 (2003年度)

	科目名	単位数
必修科目	情報処理概論(2)・情報基礎論(2)・情報システム論(2) <u>コンピュータリテラシー I (1)・同 II (1)</u>	8 単位
I 群	<u>情報倫理(2)・コンピュータプレゼンテーション(1)</u> 経営情報論(2)・E ビジネス論(2)・情報ネットワーク論(2) 情報管理論(2)・ソフトウェアデザイン I (2)・同 II (2) 文書処理演習 I (1)・同 II (1) 基礎プログラミング(2)・応用プログラミング(2)	各群より 4 単位以上 計 32 単位以上
II 群	経営科学(2)・ <u>経営学総論 I (2)・経営学総論 II (2)</u> <u>経営管理総論 I (2)・経営管理総論 II (2)</u> 会計学原理(2)・マーケティング論(2)	
III 群	情報社会論(2)・流通概論(2)・経済学(2)・経済原論(2)	
IV 群	哲学(2)・倫理学(2)・心理学(2)・国語表現法(2)	

注 1) () 内は単位数。

注 2) 下線が引いてある科目は学科の必修科目または選択必修科目。

ここで、選択科目の各科目群は次のような分野になっている。

- I 群 「情報処理」 関連分野
- II 群 「情報とビジネス」 関連分野
- III 群 「情報と社会」 関連分野
- IV 群 「情報と人間」 関連分野

II 群・III 群の科目を見てみると、経営学の専門科目で構成されていることが判る。また、IV 群の科目は教養科目で構成されている。このことより、情報処理士の資格取得に際し、学生の立場から見ると選択科目の幅が広がり、資格取得が以前より容易になっている。しかし、選択科目の取り方によっては、情報科目をあまり取らなくても情報処理士の資格を取れることになり、情報処理士の情報処理能力差が出てくることが問題視されるだろう。

例えば、表 2-4 に従って上級情報処理士の資格を取る場合を考える。総取得単位数は40単位であり、必修科目で8単位あるので、残りの32単位は選択科目 I 群からIV 群の中から4単位以上、計32単位取ることになる。そこで、情報科目の単位を最大限に揃える場合と最小限に揃える場合とを比較してみる。

<情報科目の単位を最大限に揃える場合>

I 群に属する科目の単位を全部取得すると、単位数は21単位になる。

残りの単位数は、II、III、IV 群から最低限の4単位ずつ取得すれば良い。

<情報科目の単位を最小限に揃える場合>

II 群に属する科目の単位を全部取得すると、14単位になり、

III 群に属する科目の単位を全部取得すると、8単位になり、

IV 群に属する科目の単位を全部取得すると、8単位になる。

これらの単位を合計すると30単位になるので、I 群からは最低限の4単位取得すれば良い。

従って、<情報科目の単位を最大限に揃える場合>と<情報科目の単位を最小限に揃える場合>では、 $21 - 4 = 15$ となり、15単位の差があることになる。科目数にすると8科目になる。これは極めて異例であるが、同じ資格を

持ちながら情報処理能力に差が出てしまって良いものであろうか。

表2-4は実務教育協会の規格に合わせて本学科で作成したものであり、それを実務教育協会が承認したものである。本学科では、1人でも多くの学生が上級情報処理士の資格を取れるように配慮して作成している。

比較検討すると「上級情報処理士」という資格は、「所定の科目の単位を取得したことを証明しているだけで、実力は一切保証していない資格である」ことが判る。このことが、「上級情報処理士」という資格が、社会に認知されない、または企業に評価されない原因の一つであると考えられる。

しかし昨今の本学科の学生は、検定試験を受けて資格を取るという意欲に乏しく、努力もしない。その現状で、学生に何か資格を取らせ付加価値を付けさせるには、上級情報処理士は無くしてはならない資格であると言えよう。

3 取得可能な資格試験

3-1 情報処理活用能力検定

3-1-1 試験概要

情報活用能力検定（通称J検と呼ばれている、以下、J検と表記）は、(財)専修学校教育振興会が主催している検定試験である。1994（平成6）年6月に第1回の検定を実施し、今年（2004年）で10年目を迎える。表3-1に、J検の級、科目、試験時間、配点を示す。級は4つのグレードがあり、3級以外は2つの試験科目がある。各級とも全科目合格をもって検定合格としている。3級以外は科目別合格制を採っていて、どちらかの1科目に合格した年月から1年間は合格科目の免除を受けることができ、不合格科目だけを受験することができる。合格基準は、各科目とも原則として60%以上の得点をもって合格としている。出題形式は多肢選択方式で、解答はマークシート方式を採っている。3級と準2級の試験時間は各科目とも60分である。

表3-1 情報処理活用能力検定の試験科目・試験時間・配点

級	試験科目	試験時間	配点
3級	情報リテラシー	60分	100点
準2級	情報リテラシー応用	60分	100点
	コミュニケーション	60分	100点
2級	コンピュータシステム	60分	100点
	アプリケーションシステム	70分	100点
1級	ソフトウェア開発	60分	100点
	システム構築	90分	150点

(出典：「情報処理活用能力検定 受験案内書・願書」より引用、一部抜粋)

出題パターンはほぼ確定しており、問題が8問出題され、各問題に小問が6問程度あり、全体として50問程度解答することになる。

次に、J検の各級とその程度について表3-2に示す。

表3-2 情報処理活用能力検定の級と程度

級	程度
3級	パーソナルコンピュータの操作・活用における基礎的知識と技能、および情報社会に主体的に関わる姿勢などを有する。
準2級	ネットワーク化されたオフィス環境において、情報機器の操作・活用における基本的な知識と技能、および円滑な業務遂行のためのコミュニケーション能力などを有する。
2級	エンドユーザのコンピュータ化を推進するための専門的な知識と技術、およびエンドユーザの円滑な業務遂行を支援する能力を有する。
1級	統合化された情報システムに関する体系的な知識と技術、およびシステム構築のための分析、設計ならびにソフトウェア開発などを行う総合的な能力を有する。

(出典：「情報処理活用能力検定3級受験ガイドブック」より引用)

では、具体的に各級がどのような受験者を想定しているかを表3-3に示す。

表3-3 情報処理活用能力検定の想定受験者層

	3級	準2級	2級	1級
専門学校生	情報系以外の学科	情報系学科	情報系学科の 1, 2年生	情報系学科の 2年生以上
短大生	情報系以外の学科	全学科		
大学生	情報系以外の学科	全学科		

(出典：「情報処理活用能力検定 受験案内書・願書」より引用、一部抜粋)

表3-3と「情報処理活用能力検定 受験案内書・願書」に記載してあるJ検2級、1級の出題範囲を見ると、これらの級は理工学系情報学科に対応するものであり、本学科には対応していない事が判る。従って、本学科では

準2級までが対応する級になる。J検3級の出題範囲を表3-4に示す。

表3-4 情報処理活用能力検定試験3級の出題範囲（情報リテラシー）

出題概要
情報と情報の利用：①データと情報 ②情報の表現方法 ③情報の活用、情報処理の手順 ④情報の収集と発信
パソコンの基礎：①パソコンの仕組みと働き ②OSの種類と働き、特徴 ③ヒューマンインタフェース ④ファイルシステム ⑤パソコンの情報関連機器とのインタフェース ⑥パソコンの利用環境
情報関連機器の基礎：①周辺機器の種類とその特徴 ②周辺機器およびヒューマンインタフェース機器の取扱い ③その他の情報関連機器の種類と特徴
ネットワークの基礎：①ネットワークの基礎知識 ②インターネット ③モバイルコンピューティング
アプリケーションソフトウェアの基礎：①アプリケーションソフトウェアの基礎知識 ②ワープロソフトウェアの機能 ③表計算ソフトウェアの機能 ④データベースソフトウェアの機能 ⑤プレゼンテーションソフトウェアの機能 ⑥その他のソフトウェアの機能
情報社会の基礎知識：①情報社会に関する基礎的な用語・知識 ②社会におけるコンピュータの利用 ③情報社会が抱える諸問題

(出典：「情報処理活用能力検定 受験案内書・願書」より引用)

J検準2級は、試験科目が2科目あり「情報リテラシー応用」と「コミュニケーション」である。一方の「情報リテラシー応用」の出題範囲は、ほぼ3級と同様であり表3-4に示す通りである。当然の事だが、3級より専門性が強く問題のレベルが高くなっている。他方の「コミュニケーション」の出題範囲を、表3-5に示す。この内容に対応した科目が経営科の時代には無かったが、新カリキュラムでは「コンピュータプレゼンテーション」という科目が設置され、これにより対応できることになる。

表3-5 情報処理活用能力検定準2級の出題範囲（コミュニケーション）

出題概要
コミュニケーションの基本：①コミュニケーションの重要性 ②コミュニケーションの理論的構造 ③オフィスでのコミュニケーション
情報の収集・分析：①情報の所在と形態 ②情報の収集方法 ③情報の分析・整理の技法
文書技法：①文書の理解解釈 ②文書の表記表現 ③文書の実務技能
プレゼンテーション：①プレゼンテーションプログラムの立案 ②プレゼンテーションの実施 ③発表技術とプレゼンテーション機器
電子コミュニケーション：①電子コミュニケーションの機能と特性 ②電子メールの利用 ③ホームページの利用 ④グループウェアの利用

(出典：「情報処理活用能力検定 受験案内書・願書」より引用)

3-1-2 本学科における実情

本学では、2000年に導入し、2004年度で5年目を迎えることになる。

授業の受講生数とJ検受験者数の関係は、情報処理概論60名→情報基礎論40名→J検受験者20名→J検合格者10名くらいのパターンを毎年繰り返していた。しかし2003年度は、授業の受講者数はほぼ同じなのに対して、J検受験者は1人、合格者1人という結果になった。誠に残念な結果であり、このままではいけないという焦燥の念に駆られた。この現状を打破するにはどうしたらよいか。J検3級合格に必要な科目は、「情報処理概論」・「情報基礎論」・「コンピュータリテラシー」・「文書処理演習」である。数年前の学生は、これらの科目を受講し自主的に勉強をしていた。さらに、試験直前に開かれる試験対策講座を受講し、受験勉強をして合格していた。しかし最近では、試験対策講座を開いても学生が集まらない。そこで2004年度からは「情報特講A」という科目を開設し、受験対策用の授業を行う予定である。これにより学生に受験勉強をさせることができ、また単位も与えることができる。本学科から、1人でも多くのJ検合格者を出すことを願ってやまない。

3-2 初級システムアドミニストレータ試験

3-2-1 試験概要

初級システムアドミニストレータ試験（通称シスアド、以下シスアド試験と表記）は、「情報処理の促進に関する法律」に基づいて、1994年（平成6）年秋から実施されている国家試験である。この年には、J検がスタートしているのが興味を引く。シスアド試験は、情報技術に関する一定の知識・技能をもち、部門内又はグループ内の情報化をエンドユーザの立場から推進する人を対象としての試験である。シスアド試験は「午前試験」と「午後試験」からなり、「午前試験」は「知識」を、「午後試験」は「技術の応用力及び実務能力」を問う問題が出題されている。シスアド試験は年に2回実施され、4月及び10月の第3日曜日である。合格基準は公表されていないが、午前問題・午後問題ともに80%以上の得点が必要であると言われている。

表 3-6 初級システムアドミニストレータ試験の試験時間と形式

	試験時間	形式
午前試験	9:30~12:00	多肢選択方式(四肢択一式)で80問出題
午後試験	13:00~15:30	多肢選択方式で7問出題

シスアド試験の試験時間と形式は、表 3-6 に示す通りである。これを見ると、受験生には肉体的にも精神的にもかなりきつい試験であることが伺える。また、シスアド試験の出題範囲を表 3-7 に示す。このように試験範囲が広く、実務に即したかなり考えさせる問題が出題されている。

表 3-7 初級システムアドミニストレータ試験の出題範囲

午前の試験範囲	
①コンピュータシステム	ハードウェア、基本ソフトウェア、システムの構成と方式、システム応用
②システムの開発と運用	システムの開発、システムの運用と保守
③セキュリティと標準化	セキュリティ、標準化
④情報化と経営	情報戦略、企業会計、経営工学、情報システムの活用、関連法規
午後の試験範囲	
①仕事とコンピュータに関すること	システムアドミニストレータの役割、仕事の進め方の把握・改善、コンピュータの使い方、考え方を整理するための方法・知識、など
②基幹業務システムのかかわりに関すること	基幹業務システムの概要、システム運用の概要、データの概要と流れ、など
③エンドユーザコンピューティング(EUC)に関すること	EUCの概要、パソコンのハードウェア・ソフトウェア、パソコン活用、表計算ソフトの利用、データベースソフトの利用、ヒューマンインタフェース設計、テスト及び検収、ネットワークの種類と仕組み、クライアントサーバシステム、マルチメディア、グループウェア、インターネット、など
④システム環境整備と運用管理に関すること	ハードウェアとソフトウェアの選定、ハードウェアとソフトウェアの利用環境の整備、ネットワークの利用と運用、構成管理、ファイル管理、性能・障害管理の支援、セキュリティ管理の支援、権利の保護とエチケット、など
⑤情報化推進のための表現能力に関すること	発表技術、分かりやすい文章にするための工夫、用字・用語の使い方、文章の組み立て方と文章作成の手順、ビジュアル表現、情報伝達、情報発信におけるツールの効果的な利用、など

3-2-2 本学科における実情

2000年以降、本学在籍中に受験した学生はいない。「情報システム論」を受講した学生に聞くと「シスアド試験は、難しい。」と口を揃えて言う。私はその度に「シスアドは、難しいから価値があるのだよ。」と学生に諭している。本学科在籍中に1名でも、シスアド試験の合格者が出ることを切望している。

4 資格取得という観点から見た各情報科目のあり方についての私見

2002年後期、本学科で「上級情報処理士」の資格が取得できるための申請書を作成することになる。その提出書類の一つに「カリキュラム届出表」があり、その表に登録されている全科目のシラバスを提出することが義務付けられていた。そこで、冒頭で述べた理由により自分の担当しない科目のシラバスを作成することになったのだが、その作成基準を述べる。

- A：米岡だけが担当する科目、または米岡と非常勤講師で担当する科目の場合、その科目のシラバスは米岡が作成し、それを採用する。
- B：ある科目を担当する教員が複数の非常勤講師の場合、その科目のシラバスは米岡が作成し、それを採用する。
- C：ある科目を担当する教員が1人の非常勤講師の場合で、既存の科目で継続する科目に関しては、その担当教員が作成したシラバスを採用する。
- D：ある科目を担当する非常勤講師が未決定の場合、その科目のシラバスは米岡が作成し、それを採用する。
- A～Dの各基準とそれに対応する科目を表4-1にまとめて示す。

表4-1 各基準とそれに対応する科目

基準	科目
A	情報処理概論、情報基礎論、情報システム論、経営科学、経営情報論、コンピュータリテラシーⅠ、コンピュータリテラシーⅡ
B	ソフトウェアデザインⅠ、ソフトウェアデザインⅡ
C	文書処理演習Ⅰ、文書処理演習Ⅱ、情報ネットワーク論、情報社会論、情報管理論
D	情報倫理、コンピュータプレゼンテーション、E-ビジネス論 基礎プログラミング、応用プログラミング

尚、D基準の科目に関しては、本学のシラバスには実際に担当する教員が作成したものを掲載している。後日、実務教育協会に提出したD基準科目のシラバスは実際に担当する教員が作成したものと差し替えた。B基準の科目に関しては、吉澤学科長から担当教員（非常勤講師）に米岡が作成したシラバスで授業を運営して欲しい旨を伝えて頂き、了承して頂いた。表4-2に各科目で使用する教科書を想定した表を示す。これはあくまでも私案である。

表 4-2 各情報科目で想定教科書

	科目名	想定教科書
1	情報処理概論	①「情報処理活用能力検定 3 級・準 2 級テキスト」
2	情報基礎論	②「情報処理活用能力検定 3 級受験ガイドブック」
3	情報システム論	「2003年版初級システム標準教科書」
4	経営科学	「入門経営科学」
5	経営情報論	「経営情報システム概論」
6	コンピュータリテラシー I	「30時間でマスター Word & Excel 2002」
7	コンピュータリテラシー II	「日商ビジネスコンピューティング検定試験 3 級」
8	ソフトウェアデザイン I	「30時間でマスター インターネット HTML 編」
9	ソフトウェアデザイン II	「30時間でマスター Access 2000」
10	文書処理演習 I	担当教員が作成した著書
11	文書処理演習 II	担当教員が作成した著書
12	情報ネットワーク論	担当教員が作成した著書
13	情報社会論	「高度情報化社会の諸相」
14	情報管理論	「現代の情報管理」
15	情報倫理	「情報化社会と情報倫理」
16	コンピュータプレゼンテーション	「30時間でマスター プレゼンテーション+パワーポイント」
17	E-ビジネス論	「e-ビジネスと IT ソリューション」
18	基礎プログラミング	「新訂版 Visual Basic 標準テキスト」
19	応用プログラミング	「新訂版 Visual Basic 標準テキスト」

注) 各著書の著者名、出版社、発行年などは、参考文献欄を参照されたい。

表 4-3 に情報科目とその科目が扱うテーマをキーワードで表した対応表を示す。各科目でどのような内容を取り扱うのかを整理したものであり、一目で各科目とその内容が判り、教育内容の重複を検討することができる。

表 4-3 情報科目とその科目が扱うテーマをキーワードで表した対応表

	科目名	キーワード
1	情報処理概論	情報の表現と取り扱い・パソコンシステム
2	情報基礎論	ソフトウェア・ネットワーク・情報社会
3	情報システム論	情報システム、ハードウェア、ソフトウェア、ネットワーク
4	経営科学	経営科学概論、日程計画(PERT)、在庫管理
5	経営情報論	経営情報システムの概要・歴史・展開など
6	コンピュータリテラシー I	パソコンの基本操作、インターネット入門、電子メール、ワープロ入門、表計算ソフト入門
7	コンピュータリテラシー II	Excel による表計算ソフトウェア演習
8	ソフトウェアデザイン I	HTML によるホームページ作成
9	ソフトウェアデザイン II	Accesss によるデータベース演習
10	文書処理演習 I	ワープロ演習
11	文書処理演習 II	ワープロ演習
12	情報ネットワーク論	情報ネットワークの仕組み、インターネット
13	情報社会論	情報社会の特質、情報社会に至る時代区分など
14	情報管理論	情報システム開発の概要・システム分析など
15	情報倫理	情報倫理、知的所有権、セキュリティなど
16	コンピュータプレゼンテーション	Power-Point によるプレゼンテーション演習
17	E-ビジネス論	E-ビジネスとは何か、E-ビジネス企業についてなど
18	基礎プログラミング	Visual Basic によるプログラミング入門
19	応用プログラミング	Visual Basic による応用プログラミング

各情報科目と資格試験との関連を表4-4に示す。これはおおよその目安であり、各科目と資格試験との関わり度合いを表している。尚、本論では取り上げなかった「日商ビジネスコンピューティング検定3級」についても表してある。

表4-4 各情報科目と資格試験との関連表

科目名	資格試験	J検 3級	J検 準2級	シス アド	その他の検定試験
1 情報処理概論		◎	◎	◎	
2 情報基礎論		◎	◎	◎	
3 情報システム論		○	◎	◎	
4 経営科学				◎	
5 経営情報論		△	○	○	
6 コンピュータリテラシーⅠ		◎	◎	◎	「日商ビジネスコンピューティング検定3級」に対応
7 コンピュータリテラシーⅡ		◎	◎	◎	
8 ソフトウェアデザインⅠ		◎	◎	◎	
9 ソフトウェアデザインⅡ		△	◎	◎	
10 文書処理演習Ⅰ		◎	△	△	日商及び全経の「ワープロ検定」に対応
11 文書処理演習Ⅱ		◎	△	△	
12 情報ネットワーク論		◎	◎	◎	
13 情報社会論		○	○	○	
14 情報管理論		△	○	◎	
15 情報倫理		○	○	○	
16 コンピュータプレゼンテーション		◎	◎	◎	
17 E-ビジネス論		△	△	○	
18 基礎プログラミング					
19 応用プログラミング					

注) ◎印は非常に関連する、○印は関連する、△印はやや関連する。

今回、情報科目のカリキュラムを作成するにあたり、全体の科目内容を考慮した各科目の特徴・留意点・意見などについて、私見を述べてみる。

4-1 A基準の科目

(1) 「情報処理概論」・「情報基礎論」

- 1) 教育内容より、この2科目は「情報処理概論Ⅰ・Ⅱ」と捉えて良い。
- 2) この両科目のねらいは、J検3級・準2級を合格させることである。
- 3) 「情報処理士」の資格取得には「情報処理概論」が必修科目である。「上級情報処理士」の資格取得には、さらに「情報基礎論」が必修科目であるので、この両科目は資格取得の要である。

- 4) この2科目は「情報処理概論Ⅰ・Ⅱ」という科目名が良い。Ⅰ・Ⅱという番号を付けることにより、科目の連続性が明らかになり、強調される。

科目名が違くと、それぞれが独立した内容を持ち、連続性が無いものと学生は思い込むようである。シラバスをよく読めば、そのような勘違いはしないだろうが、学生はシラバスを読んでいないので混乱を招いている。

毎年、前期の「情報処理概論」を受講せず、後期の「情報基礎論」から受講し、J検が受験できないという苦情を言う学生が後を絶たない。

(2) 「情報システム論」

- 1) この科目は、シスアド試験の受験を念頭にして授業を展開している。
- 2) この科目では、シスアド試験午前問題の70%程度の内容を扱っている。

(3) 「経営科学」

- 1) この科目は、シスアド試験の受験を念頭にして授業を展開している。
- 2) シスアド試験に頻出する項目である、日程計画（PERT）と在庫管理について取り上げている。
- 3) 経営科学の範疇には統計処理の分野も含まれ、またシスアド試験にも統計処理の出題があるので、「統計学」の設置が望ましい。
- 4) 分野によっては、表計算ソフトを利用して実習することが好ましい。

(4) 「経営情報論」

- 1) この科目内容はシスアド試験には直接関係しないが、「業務改善」などはシスアド試験に出題されているので授業で取り上げるのが良い。

(5) 「コンピュータリテラシーⅠ」・「コンピュータリテラシーⅡ」

- 1) この科目は、パソコンの基礎的な操作を習得する実習基幹科目である。

2) この科目は学科必修科目であり、各種資格を取るには最重要科目である。

4-2 B基準の科目

(1) 「ソフトウェアデザインⅠ」・「ソフトウェアデザインⅡ」

- 1) 「ソフトウェアデザインⅠ・Ⅱ」は、科目内容が独立しているので「ソフトウェアデザインA・B」という科目名にした方が良い。
- 2) この科目の担当は非常勤の教員だけなので、専任教員がシラバス・教科書・教科内容を考えるなど配慮しなければならない。
- 3) この科目は、シスアドなどの試験や実務の面から見ても重要である。

4-3 C基準の科目

(1) 「情報管理論」

- 1) 私が調査した限り、この科目が扱う教育内容は、核がはっきりしない。「情報管理論」という名の付く著書を調べると、その内容がデータベース論であったり、経営情報システム論であったり、情報学総論であったりして一定していないことが判る。
- 2) そのため、他の情報科目と教育内容が重なる部分が出るため、注意しなければならない。
- 3) この科目は、2004年度から米岡が担当して、情報システム開発に関する内容を扱っている。それは、シスアド試験に出題される項目でありながら、他の科目では扱わない項目であるからである。
- 4) 「情報管理論」は「情報システム開発論」などに変更する方が良い。

(2) 「情報社会論」

- 1) この科目は、本学科の教職科目にもなっている。
- 2) この科目は、必修科目である「情報倫理」の内容と重なる部分が多い。
- 3) 「情報社会論」と「情報倫理」は統合することも可能であろう。
- 4) 本学科の学生に教えるのに適した教科書の書籍が無く、発刊が待たれる。

(3) 「情報ネットワーク論」

- 1) 「情報基礎論」と内容が重なる部分があるので、配慮が必要であろう。

(4) 「文書処理演習Ⅰ」・「文書処理演習Ⅱ」

- 1) パソコンの基礎を学び、タッチタイピングの技術を身に付けさせ、ワープロ検定を受験させるのに重要科目である。

4-4 D基準の科目

(1) 「情報倫理」

- 1) この科目は、学科の必修科目である。
- 2) この科目は、「情報社会論」の内容と重なる部分が多い。
- 3) 「情報倫理」と「情報社会論」は統合することも可能であろう。
- 4) 本学科の学生に教えるのに適した教科書的書籍が無く、発刊が待たれる。

(2) 「コンピュータプレゼンテーション」

- 1) この科目は、学科の必修科目である。
- 2) プレゼンテーション技術は、今後さらに重要性が増加するであろう。
- 3) J検準2級「コミュニケーション」の受験対策にもなる。

(3) 「Eービジネス論」

- 1) 「経営情報論」などの科目と内容が重複するので配慮が必要である。
- 2) 本学科の学生に教えるのに適した教科書的書籍が無く、発刊が待たれる。

(4) 「基礎プログラミング」・「応用プログラミング」

- 1) この両科目では、Visual Basic（以下、VBと表記）によるプログラミングを教えている。その長所・短所を次に述べる。

<長所>

- ・VBをマスターすると、ExcelやAccessなどのマクロを作成できる。

- ・VBは、Windows上でプログラミングできる。
- ・VBは、初心者に向いている言語である。

<欠点>

- 1 VBはマイクロソフト社の言語であり、JIS化されていない。
 - 2 VBでは、「基本情報処理技術者試験」が受けられない。
 - 3 VBは、実務レベルではあまり使われていない。
- 2) 今後、VB以外にもJava、C言語などの教育を検討する必要がある。

4-4 2004年度入学生より開講される新設科目

2004年度のカリキュラムは、2003年度のものよりさらに資格が取れる科目を用意し、資格取得ができるように配慮してある。

(1) 「データベース論」

- 1) この科目は、J検準2級やシスアド試験の受験対策の授業を行う。
- 2) データベースソフトを利用した実習をした方が、理解しやすい。

(2) 「情報特講A」

- 1) この科目は、J検3級に合格するように受験対策用の授業を行う。
- 2) この科目は、検定試験日に合わせた集中授業を行う。

(3) 「情報特講B」

- 1) この科目は、シスアド試験やJ検準2級の受験対策用の授業を行う。
- 2) この科目は、検定試験日に合わせた集中授業を行う。

表4-5に、2004年度の経営情報科における情報科目の開講年次表を示す。これは、教育効果を十分に考慮し、J検などの試験が受けられるように配慮してある。

表 4-5 2004年度経営情報科における情報科目の開講年次表

1年次		2年次	
前期	後期	前期	後期
情報処理概論	情報基礎論	情報システム論	E-ビジネス論
情報倫理	経営科学	経営情報論	情報社会論
情報ネットワーク論	データベース論	情報管理論	
文書処理演習 I	文書処理演習 II		
コンピュータリテラシー I	コンピュータリテラシー II	ソフトウェアデザイン I	ソフトウェアデザイン II
コンピュータプレゼンテーション	コンピュータプレゼンテーション	基礎プログラミング	応用プログラミング
	情報特講 A (集中)	情報特講 B (集中)	

表 4-6 に、2004年度入学生から適応する「上級情報処理士の資格を取得するための科目表」を示す。2004年度から開講する「データベース論」、「情報特講 A」、「情報特講 B」の 3 科目が I 群に含まれており、情報科目の選択の幅が広がり、さらに充実したものになっている。尚、紙面の都合上「情報処理士の資格を取得するための科目表」を掲載していないが、I 群に「データベース論」、「情報特講 A」、「情報特講 B」の 3 科目が加わるだけであり、その他は変わらない。

表 4-6 上級情報処理士の資格を取得するための科目表 (2004年度)

	科目名	単位数
必修科目	情報処理概論(2)・情報基礎論(2)・情報システム論(2) コンピュータリテラシー I (1)・同 II (1)	8 単位
I 群	情報倫理(2)・コンピュータプレゼンテーション(1) 経営情報論(2)・E-ビジネス論(2)・情報ネットワーク論(2) 情報管理論(2)・ソフトウェアデザイン I (2)・同 II (2) 文書処理演習 I (1)・同 II (1) 基礎プログラミング(2)・応用プログラミング(2) データベース論・情報特講 A・情報特講 B	各群より 4 単位以上 計 32 単位以上
II 群	経営科学(2)・経営学総論 I (2)・経営学総論 II (2) 経営管理総論 I (2)・経営管理総論 II (2) 会計学原理(2)・マーケティング論(2)	
III 群	情報社会論(2)・流通概論(2)・経済学(2)・経済原論(2)	
IV 群	哲学(2)・倫理学(2)・心理学(2)・国語表現法(2)	

注 1) () 内は単位数。

注 2) 下線が引いてある科目は学科の必修科目または選択必修科目。

5 まとめ

情報科目カリキュラムをまとめる作業をしていて、考えさせられることが多かった。私は、意識的にJ検やシスアド試験などの資格取得を考えたカリキュラムを考えたが、同時に「短期大学が資格取得を目指した教育をしてよいものだろうか」という疑問が常にあった。「大学は資格を取得する所ではない。資格取得を目指すのは専門学校である。」というのが世間一般の考えであろう。この2つの考えが、常に葛藤していた。

今から10年くらい前の高校生の進学希望は、大学進学か専門学校進学であった。4大に進学し大学卒業という肩書きを取って就職するか、専門学校に進学し、専門技術を身につけ、資格などを取得し、専門職に就くという選択を考えたからであろう。以前より、短期大学は人気あまり無かった。その理由として、短期大学は教育機関としての存在が大学や専門学校に比べ希薄に見えたからであろう。特に近年は少子化の影響で大学に入り易くなり、専門学校の人気も陰りを見せ始めている。そのような状況で短期大学が生き残るためには、短期大学ならではの資格を取得し、その専門職に就けることが理想であり、最重要課題である。それができれば、短期大学の存在価値を社会に知らしめることができ、大学・専門学校と差別化を図ることができるであろう。事実、本学でも介護福祉士の資格を取得できる学科は、依然として人気がある。これらのことより総合的に考えると、短期大学は資格取得を目標とした教育をして良いと結論づけられる。

次に、情報科目カリキュラムについて述べる。「コンピュータサイエンス」に関するカリキュラムは、情報処理学会などで発表されているが、これらは何れも理工系学部を対象とし、コンピュータ技術者を育成するものである。本学科の様な文科系情報学科とは、教育目標が異なり当てはまらない。社会科学系情報学部学科、例えば経営情報学部や社会情報学部などの情報科目カリキュラムの標準化の研究はまだ成熟していない様である。社会科学系情報学部の教育目標は、理工系のそれとは違い多様化している点が話を混乱させ、

一元化できない要因であると考えられる。研究成果の報告が待たれる。

最近、大学の経営学部と経営情報学部の間で教育内容の差が段々と無くなっていくように感じる。それは、経営学の中に情報学が当たり前のように取り込まれているからである。しかし、経営情報学部の存在意義があるのは、システムアドミニストレータの様な人材を輩出できる点ではないか。このような経営の実務が判り、コンピュータを使いこなせる人材を社会は強く求めているので、社会の経営情報学部に対する期待は高く、経営情報学部が社会に果たすその貢献度は大きいと言える。

参考文献

- 1) 全国大学・短期大学実務教育協会編「平成14年度 会則・称号認定関係規定集」全国大学・短期大学実務教育協会 2002年
- 2) 全国大学・短期大学実務教育協会編「会則・称号認定関係規定集改正点等解説書」全国大学・短期大学実務教育協会 2002年
- 3) (財) 専修学校教育振興会情報教育研究会編著「情報処理活用能力検定3級・準2級テキスト 情報リテラシー」実教出版 2003年
- 4) (財) 専修学校教育振興会情報教育研究会編著「情報処理活用能力検定3級受験ガイドブック」実教出版 2003年
- 5) (財) 専修学校教育振興会情報教育研究会編著「情報処理活用能力検定3級テキスト コミュニケーション」実教出版 2000年
- 6) (財) 専修学校教育振興会情報教育研究会編著「情報処理活用能力検定準2級受験ガイドブック」実教出版 2003年
- 7) 早川芳彦他著「初級システム標準教科書」オーム社 2003年
- 8) (財) 日本情報処理開発協会編「システムアドミニストレータテキスト」中央情報教育研究所 1998年
- 9) 宮川公男他著「入門経営科学」実教出版 1999年
- 10) 荒木勉他著「情報処理関連知識テキストシリーズⅢ 経営科学」実教出版 1988年
- 11) 金山茂雄編著「経営情報システム概論」創成社 2002年
- 12) 佐々木宏著「図解 経営情報システム」同文館 1997年
- 13) 宮川公男編著「経営情報システム」中央経済社 1994年
- 14) 杉原敏夫他著「経営情報システム」共立出版 1997年
- 15) 山本孝他著「経営情報システム論を学ぶ人のために」世界思想社 2001年

- 16) 遠山暁他著「経営情報論」有斐閣 2003年
- 17) 浅居喜代治編著「現代 経営情報学概論」オーム社 1988年
- 18) 涌田宏昭編著「新しい経営情報科学」中央経済社 1995年
- 19) 安藤明之著「情報システムとネットワーク」工学図書 2004年
- 20) 猪平進他著「ユビキタス時代の情報管理概論」共立出版 2003年
- 21) 情報管理研究会監修「情報管理実務」産能大学出版部 2003年
- 22) 大西正和他編著「現代の情報管理」建帛社 2000年
- 23) 宮詰正マスター「30時間でマスター Word & Excel 2002」実教出版 2002年
- 24) 高橋三雄著「日商ビジネスコンピューティング検定試験3級」実教出版 2002年
- 25) 永井克昇他著「30時間でマスター プレゼンテーション+パワーポイント」実教出版 1999年
- 26) 有阪正芳他著「30時間でマスター インターネットHTML編」実教出版 2000年
- 27) 榎本竜二他著「30時間でマスター Access 2000」実教出版 2002年
- 28) 安藤明之著「新訂版 Visual Basic 標準テキスト」工学図書 2003年
- 29) 辰巳文夫著「情報化社会と情報倫理」共立出版 2000年
- 30) (社)私立大学情報教育協会編「情報倫理概論 1995年版」(社)私立大学情報教育協会 1994年
- 31) 名和小太郎他編著「ITユーザの法律と倫理」共立出版 2001年
- 32) 梅本吉彦編著「情報社会と情報倫理」丸善 2002年
- 33) 大島武他著「ケースで考える情報社会」三和書籍 2004年
- 34) 田中正仁他著「e-ビジネスとITソリューション」日科技連 2000年
- 35) 石川博著「e-ビジネス技術 入門教科書」CQ出版社 2002年
- 36) アーサーアンダーセン著「図解 e-ビジネス」東洋経済新報社 2000年
- 37) 折笠和文著「高度情報化社会の諸相」同文館出版 1996年
- 38) 木暮仁著「教科書 情報と社会」日科技連 2002年
- 39) 坂村健著「NHK 人間講座 「ユビキタス社会」がやってきた 人とコンピュータの未来」NHK出版 2004年
- 40) 安藤明之著「2台からはじめる超入門パソコンネットワーク」かんき出版 2000年
- 41) 松本良治著「情報ネットワーク論」オーム社出版局 2000年
- 42) 速水治夫他著「IT Text データベース」オーム社 2002年
- 43) 田中功他著「やさしい情報検索とリレーショナル・データベース」培風館 2004年
- 44) 高橋麻奈著「ここからはじめるデータベース」日本実業出版社 2000年
- 45) 中島尚正他著「総合情報学」(財)放送大学教育振興会 2002年
- 46) 西和彦著「西和彦 ITの未来を読む 365冊+α」日経BP社 2001年
- 47) 石田晴久編著「コンピュータの名著・古典100冊」インプレス 2003年
- 48) NTT出版編「情報社会を読む143冊の本」NTT出版 2002年

- 49) 有澤誠他著「コンピュータサイエンスをいかに学ぶか」共立出版 1993年
- 50) 國井利泰著「コンピュータサイエンスのカリキュラム」共立出版 1995年
- 51) (社) 私立大学情報教育協会編「情報基礎教育モデルシラバス 1997年版」(社) 私立大学情報教育協会 1996年

Summary

Research on the information subject curriculum in the department
of the Urawa university junior college management information

Manabu Yoneoka

The department of the Urawa Junior College management changed into the department of the Urawa university junior college management information in April, 2003. The main changed parts are points that six subjects of information subjects were added. Then, I summarized the changed part by the new information subject curriculum in this paper.

It is as being shown below.

1. By the new curriculum, the student of the department of management information can acquire the Certified Business Information Administrator in Advanced Studies (Joukyu Jyohousyori-shi) now.

2. It was prepared by the new curriculum so that the student of the department of management information could take a beginners' class system administrator examination.

3. It becomes easy for the student of the department of management information to take the 3rd class of an information processing practical use capability certification examination (Jyohousyori-katsuyounouryoku-kentei), and semi- 2 class from before by the new curriculum.

4. Since the information subject turned into 19 subjects, I arranged educational contents about all subjects. I summarized that in this paper.

5. The curriculum in the 2004 fiscal year was changed so that it might be easy to take still more nearly various qualification.